

真説 金田一耕助

横溝正史



真説 金田一耕助

横溝正史

真説 金田一耕助

昭和52年11月25日 印刷

昭和52年12月5日 発行

著者 横溝正史
編集人 吉田掟二
発行人 伊奈一男

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪市北区堂島上

〒802 北九州市小倉北区紺屋町

〒450 名古屋市中村区名駅

印刷所 東京ベル印刷

製本所 正文社

© Seishi Yokomizo, 1977 Printed in Japan

目次

金田一耕助恐縮す……………	7
人気とは不可解なもの……………	12
映画初出演の弁……………	17
映画になつた金田一耕助……………	22
金田一耕助最後の事件Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……………	27
「犬神家の一族」の思い出……………	40
金田一耕助、山を下る……………	44
最高と最低……………	49
タレント業失格……………	54

	本名と筆名……………	59
	小説と映画Ⅰ、Ⅱ……………	64
	勲章を貰う話……………	74
	金田一耕助の収入……………	79
	騒がしかりきこの一年……………	84
	終戦後の初正月……………	91
	私のベスト10……………	96
	一人の金田一耕助の死……………	101
	屁をかぞえる人びと……………	106
	腰砕け……………	111
	デイクソン・カーⅠ、Ⅱ……………	116
	カゼをひくの弁……………	126

「本陣殺人事件」由来Ⅰ、Ⅱ……………	131
カーの死……………	141
バレンタイン・デーの恐怖……………	146
Whodunit の映画化……………	151
昭和52年4月2日……………	156
横溝正史シリーズ……………	161
人形佐七捕物帳Ⅰ、Ⅱ……………	166
「蝶々殺人事件」縁起Ⅰ、Ⅱ……………	176
三本指の男……………	186
蝶々失踪事件……………	191
ブームやつれ……………	196
「獄門島」懐古Ⅰ、Ⅱ……………	201

「八つ墓村」考Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……………	211
「陰獣」の試写を見る……………	226
病院坂の首縊りの家……………	231
怪奇探偵作家……………	236
モウロクもまた愉し……………	241
Yの悲劇……………	246
悪魔が来りて笛を吹く……………	251
さらば金田一耕助……………	256
あとがき……………	261

付・昭和五十一年八月二十二日と昭和五十二年八月二十日の日記抄

装幀・イラスト 和田 誠

真說

金田一耕助

金田一耕助恐縮す

十一月二十七日、即ち一柳家で恐ろしい殺人事件のあった翌日のことである。

伯備線の清——駅をおりて、ぶらぶらと川——村のほうへ歩いて来るひとりの青年があった。見たところ二十五、六、中肉中背というよりはいくらか小柄な青年で、飛白の対の羽織と着物、それに縞の細い袴をはいているが、羽織も着物もしわだらけだし、袴は襷もわからぬほどたるんでいるし、紺足袋は爪が出そうになっているし、下駄はちびているし、帽子は形がくずれているし……つまり、その年頃の青年としては、おそろしく風采を構わぬ人物なのである。

色は白いほうだが、容貌は取り立てていうほどの事はない。(中略)

その時分東京へいくと、こういうタイプの青年は珍しくなかった。早稲田あたりの下宿にはこういうのがごろごろしているし、場末のレビュー劇場の作者部屋にも、これに似た風采の人物がまま見受けられた。

以上が「本陣殺人事件」ではじめて顔を出したときの金田一耕助なる人物の描写である。

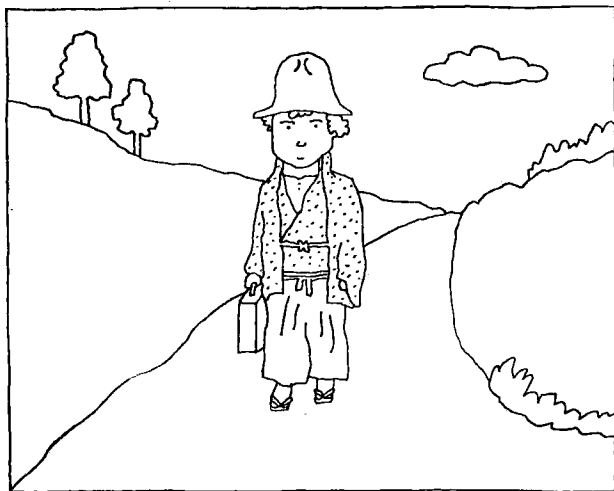
断っておくが本陣殺人事件が起こったのは昭和十二年十一月のことだから、日華事変(日中戦争)の勃発した年の秋である。当時はまだ現代ほど洋服が一般化されておらず、サラリーマンで

も学生でも、勤め先や学校でこそしかつめらしく洋服を着ていたが、家庭や下宿ではみんな和服だったものである。さすがに袴ははいていなかったが、それでも場末のレビュー劇場の座付き作者など、神聖なる職場で着流しは礼を失すると思ったのか、たいてい袴をはいていたものである。げんに金田一耕助の冒険談の記録者であるところの私なども、その昔、博文館なる大出版社に勤めていたことがあるが、たいてい和服に袴といういでたちで出勤していた。

これを要するに金田一耕助は、当時の日本人としては標準的服装をしているだけで、べつに奇をてらっているわけではない。むしろ紺足袋に爪が出そうになっていたり、下駄がちびっていたり、帽子は形がくずれてくちやくちやになっているところなど、およそ洒落しゃれのセンスに欠けているわけで、当時としては不恰な男としてヒンシュクされるべきである。

それがいまではカッコいいと持てはやされるのだから、これをしも不思議といわずしてなんぞやである。しかも若いころアメリカへ渡って皿洗いなんかしているうちに、ふとした好奇心から麻薬の味を覚えた云々、というところから、金田一耕助こそヒッピーの元祖であろうなどという説が出たのには、金田一耕助自身つくづく恐縮しているようである。若気のあやまちがあたかも美德（？）のように取り沙汰されるのは、アバタもエクボのたくいであろうか。それにしてもわからないのはこの男の出生である。

金田一——と、こういう珍しい名前から、諸君もすぐ思い出されるであろうが、同じ姓を持つ



た人で有名なアイヌ学者がある。この人はたしか東北か北海道の出身だったと思うが、金田一耕助もその地方の出身らしく、言葉にかなりひどい訛りがあったうえに、どうかすると吃るどもことがある。たという。

と、「本陣殺人事件」にあるが、それ以外かれの出生をしろ手掛かりが、どこにもないのも不思議の一つであろう。ただ金田一という珍しい姓のおかげで、かれがずいぶんトクをしていることはたしかだが、その点、ご本家の金田一京助先生のご令息春彦先生のほうでも、耕助君のおかげで世間一般、この読みにくい苗字を正確に、キンダイチと発音してくれるようになってたのはありがたい、といっていられるそうだが、それを聞いて金田一耕助すっかり恐縮しているようである。

昭和五十一年八月二十二日(日)晴

◎「金田一耕助の出生」半ペラ八枚。

◎神戸から先日きた西田さん(編集者注)西田政治さん・大正九年以来の親友、推理小説界の大御所)の手紙によると、セミの異常発生とやら、何かの前兆ではないかとある。軽井沢にきた時分からセミ多く、軽井沢でこんなにセミをきくのははじめてだといっていたが、今日もセミの声しきりで、夏のぶりかえしを思わせる。テレビによると海水浴場大繁昌とやら。

◎午前中二度寝。

◎午後真説金田一耕助(金田一耕助七不思議)の第一回を半ペラ八枚と第二回の半ペラ四枚の下書きかく。心臓たえがたきほど重くなる。

◎夜ラジオとテレビで巨×中日戦。

◎M2W一本14。(注)Mは精神安定剤、Wはウィスキー、一本とあるはポケット瓶)

八月二十三日(月)晴

◎六時目覚めたが心臓が不安なので七時までウトウト。

◎朝食後奥の六畳で十一時迄二度寝。

◎角川より重版四点▲夜歩く④六万8/17▲真珠郎⑥六万8/17▲悪魔の設計図(再)五万8/13▲犬神家の一族⑧8/12五万。

◎亮一(編注)長男亮一氏・音楽評論家)より電話、帰京の挨拶。

◎島崎君より電話、二両日中に原稿と写真撮影にくる由。

◎「金田一耕助の人気」半ペラ八枚かいて、西田さん到手紙かき十五日にかいた分と一五〇円の切手同封。

◎夜散歩のちM2W一本。

八月二十四日(火)晴

◎朝食前に西田さんの手紙投函かたがた、家内と散歩。

◎松浦君、大工さんをつれてくる。

◎十一時まで二度寝。

◎橋爪君より電話、NTVの春夏秋冬に出てほしいとのこと。一カ月延期してもらおう。

◎島崎君より電話。明日来軽とのこと。

◎「毎日」の福田君来訪。「真説金田一耕助」二回分渡すに、一年連載してほしいとのこと。約五十回になるわけ。あとで後悔するとしりながらOKす。われながら困ったものである。

◎「病院坂」書出し半ペラ六枚。◎角谷君より送金通知。

◎夜散歩のちM2W一本。

◎合計七、五〇〇歩。(注)万歩計)

八月二十五日(水)くもり

◎七時目覚め、八時半朝食。今日より大工が入るので二階で二度寝。十一時目覚む。

◎角川より三点。(本一点と新刊予告二点)▲華やかな野獣(新刊)十万8/24十冊。(速達)▲毒の矢(初)9/10

十万▲仮面舞踏会9/10十万、以上で四十点揃ったのではないか。

◎午後三時頃島崎君カメラマンつれてくる。一時間ほどいろいろポーズとる。いま書いている随筆完結すると幻影社で本にしてくれる由。

◎病院坂半ペラ四枚、通算十枚。

◎テレビとラジオで巨人と大洋。◎M2W一本1/4。

◎合計五、〇〇〇歩。

八月二十六日(木)雨

◎雨にて終日暗く寒し。

◎今日も大工が入るので朝食後二階で十一時半まで二度寝。二度寝から目覚めると、心臓いくらか軽い。

◎「病院坂」を半ペラ二十枚(通算30枚)迄書く。

◎今君より電話。九月二日まで待ってもらうことにする。

◎橋爪君より電話。「春夏秋冬」の録画撮り九月二十七日三時から四時まで。

◎机の下に電気ゴタツを入れ、夜はデザインプレックスを入れる。ことほど寒し。

◎大工は終わり、あと建具屋と塗装屋。

◎M2W一本1/3。

八月二十七日(金)くもり

▲金田一耕助の冒険(初)十万(二冊)あと八冊は角川へ保留しておいて貰うこと。

◎黄金の指紋(朝日ソノラマ)十冊。

◎桑原隆次郎君(毎日書籍編集室)より真説金田一耕助の出版申込みあり、それについて、福田君に電話。原稿のコピーを送ってもらうこと。

◎角川の藤本君、小藤田千栄子女史を同伴、午後二時来訪。映画になった金田一耕助について取材。三時辞去。

◎家内と一緒にシャレーまで。帰途、陽子さん、我妻夫人を見舞う。

◎夜家内は松本さんと松田さんの講演会へ。

◎自分はいままで書いた原稿の書き直し。

◎M2W一本。◎九、二〇〇歩。

八月二十八日(土)晴、くもり

◎建具屋終わる。

◎朝家内に掘りゴタツにしよう。これは必ずしも寒さのためではなく腰かけで仕事が出るためである。

◎二度寝、十一時に目覚む。

◎目覚めてから病院坂書き直し、半ペラ二十七枚まで。

◎二時より家内と二人でお別れの会に出席。ことしは心臓がおかしく、どの会へも欠席したので、今日のはじめて主だったみなさんにお目にかかる。会場冷えて帰宅後下痢したり。

◎夜も机にむかろうが、大した仕事にならず。

◎M2W8/10。これくらいで眠れるとありがたい。

◎合計五、五〇〇歩。

人気とは不可解なもの

それにしても不思議なのは金田一耕助の人気である。おかげでかれの冒険談の記録者であるところの私のふところには、文庫本の印税がザクザクところどころでこんで来て、さぞやわが世の春を謳歌しているのではないかと思われそうだが、それが必ずしもそうではない。

不可解な現象にはつねに不安がつきまとうものである。私の本が一貫して売れてきたのならともかく、いちじサッパリだったのが、四、五年まえに文庫本に入ったかと思うと、アレヨアレヨという売れ行きだから、これ不可解な現象といわずしてなんぞや。小心者の私は嬉しいという気持ちより不安のほうが先走った。

「なぜ、なぜ、なぜなんだい」

だれもそれに対して的確に答えてくれるものはいなかった。だいいち金田一耕助自身首をかき上げて、

「それはまあ、先生の語りくちがお上手なんじゃないですか。つまり私の提供する材料を、料理する庖丁さばきが鮮やかだとか……」

と、柄にもなく月並みなお世辞をいっていた。ついでにいいしておくが、かれは私より十くらい若いらしい。そこでいつのほどよりか私をつかまえて、先生とか成城の先生とよぶようになり、私のほ

うでは相手の物にこだわらぬ性格をよいことにして、ずうずうしくも耕ちゃんなどと呼んでいる。しかし、金田一耕助のお世辞でも私はまだ釈然としなかった。文庫本というやつはほかの単行本にくらべるとお値段がやすい。いつどこでも手に入りやすいという利点もある。それにしてもその文庫本のなかでも、私のものだけが異常ともいふべき売れ行きだときいては、依然として不可解千万である。

「なぜ、なぜ、なぜなんだい」

と、私は自問自答しつづけてきたが、去年の春頃私はやっとその解答らしきものを発見した。それは神戸からきた三人の女性連名の手紙である。差出人のところに「金田一耕助を守る会」とあり、三人の若い女性の署名があった。内容はこういう意味である。

「われわれは『金田一耕助を守る会』というのを結成した。金田一耕助さんを絶対に結婚させないでほしい。耕助さんが早苗さんによるめきそうになったときはハラハラした」

耕助が早苗さんによるめきそうになったというのは「獄門島」のことである。かれはその後もう一度失恋しており、それ以来独身主義者になったらしいのだが、私はその手紙をよんで、

「ああ、これかあ」

と、やっと納得したような気がした。私の文庫本の異常な売れ行きは、金田一耕助の人柄による人気なのかと、はじめて眼のなかの埃がとれたような気がしたことである。

つまりいつも襟垢えりあかのついた着物にヨレヨレの袴をはいて、もじやもじや頭をかきまわすくせが

談の主人公には、年齢というものが無いらしいのも不思議である。



あり、ひとたびもじゃもじゃ頭をかきまわすと、フケが飛んで散乱するという、いつも孤独で、しかも、小柄で貧相な探偵さんは、女性の保護欲をそそり、母性愛本能をくすぐるのではないかと気がついた。そう思っていると果たして別の若い女性から、

「私を耕助さんのお嫁にしてください」

と、いう手紙をもらった。それらの手紙を耕ちゃんにみせると、耕ちゃん大テレにテレて、例によって例のごとく、もじゃもじゃ頭をひっかきまわしながら、

「じゃ、じゃ、冗談じゃない。こ、こ、このひとたちは、わ、わ、わたしのトシを、ご、ご、ご存じなんでしょうか」

と、吃りに吃ったものだが、それにしても冒険